



# JSHCT Letter No.56

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

一般社団法人日本造血細胞移植学会

October 2014

## 目次

第37回日本造血細胞移植学会総会についてのお知らせ	ii
造血幹細胞移植推進事業フォーラム	iii
Invitation to 2015 APBMT Annual Congress in Okinawa	iii
平成26年度同種造血細胞移植後フォローアップのための看護師研修を終えて	iv
第3回造血細胞移植コーディネーター(HCTC)研修会の報告	v
日本造血細胞移植学会造血細胞移植認定医一覧	vi - viii
看護部会企画「『造血細胞移植看護ネットワーク HCTNN』の設立に思いを寄せる」	ix
私の選んだ重要論文	x
施設紹介「鹿児島大学 小児科」	xi
会員の声「長野赤十字病院血液内科 小林光」	xii
各種委員会からのお知らせ	xiii

## 第37回日本造血細胞移植学会総会についてのお知らせ

第37回日本造血細胞移植学会総会 総会会長 小川 啓恭  
(兵庫医科大学 内科学講座血液内科)

第37回日本造血細胞移植学会総会は、2014年3月5日から7日に、神戸国際会議場と神戸ポートピアホテルで開催されます。現在、プログラムの構成を鋭意進めています。

ご承知のように、本邦における造血幹細胞療法の発展は目覚ましく、多くの不治の病の患者の治癒が得られるようになってきました。今後、もっと広い年齢層に、もっと広い疾患に適応されるようになると思われます。さらに、間葉系幹細胞(mesenchymal stem cell=MSC)などの他の種類の幹細胞も用いられるようになり、まさに細胞治療の時代に入ったと言えるでしょう。MSC 1つ取ってみても、現在は重症GVHDに特化して用いられていますが、難治性の自己免疫疾患(膠原病)、アトピー性皮膚炎、肝硬変にまで、応用されようとしています。この現状は、我々は血液疾患の領域だけにとどまらず、もっと広い視野で、この細胞治療に接して行かなければならないことを示しています。

ここで1つ危惧すべきことがあります。上記の骨髄移植から始まった細胞治療の発展に、日本人の寄与が少ないことです。今のpost-transplant CYによるHLA半合致移植のブームを考えると、常に外圧があり、それが原動力になって移植を発展させてきました。海外での新しい発見を、日本人は巧みに本邦にあった形にmodifyし、医療経済的にも効率よく、現在の移植医療を作り上げてきました。ただ、この作業は、頭のよい優秀な人にとっては、困難なことではありません。一方、困難ではあるが、新しいことにchallengeすることは、失敗するriskも高く、非常に厳しい世界ですが、これを行わない分野に未来はないと思っています。本学会では、この点を重視し、「もっと自由な発想で」をテーマとし、シンポジウムでは、新しい困難なことにchallengeしている人たちにお話しいただくことを計画しています。

今回から、造血細胞移植認定医を新規に取得する方のための教育セミナーに加えて、初めて面接試験が導入されることになりました。これに、認定医資格を維持するための教育講演が重なり、スケジュール面で極めてtightになってきました。本来の学会の中身を壊さないように配慮した結果、新しく認定医を取得しようという方には、少々厳しいスケジュールになっていますが、ご辛抱頂けると有り難いです。おそらく次回の総会からは、教育セミナーと面接試験は、総会とは切り離れた形で実施されるのではないかと思います。

総体的に、臨床研究に関わる事件の影響を受け、各製薬企業が緊縮財政に動いていて、経済的には厳しい学会になりそうですが、神戸は、交通の便がよい上、異国情緒あふれる港町、風光明媚で食事も美味ですので、是非とも、多くの皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

## 造血幹細胞移植推進事業フォーラム

日本造血細胞移植学会 理事長 岡本真一郎

日本造血細胞移植学会 学術集会企画委員会 委員長 豊嶋 崇徳

移植に用いる造血幹細胞の適切な供給の推進に関する法律の施行に伴い、非血縁者造血幹細胞を提供する新たなインフラが整備されました。これを受けて、これまでJSHCTの年次学術集会中に開催されてきた骨髄バンク・臍帯血バンク合同報告会を発展的に終了し、JSHCT年次学術集会のプログラムの1つとして、移植に関わる様々な関連機関と非血縁者造血幹細胞提供に関連する最新かつ重要な情報を共有するオープンなセッション「造血幹細胞移植推進事業フォーラム」を常設することといたしました。

開催日時は3月7日(土)7:20~8:50神戸国際会議場 第3会場を予定しています。プログラムの内容は、学会を中心として日本骨髄バンク、臍帯血バンク、日本造血細胞移植データセンター、日本赤十字社(支援機関)、厚生労働省などの関連機関と検討する予定です。ご参加頂きますようよろしくお願い申し上げます。

## Invitation to 2015 APBMT Annual Congress in Okinawa

第20回アジア太平洋造血細胞移植学会(APBMT)年次学術集会会長

アジア太平洋造血細胞移植学会(APBMT)理事長 岡本真一郎

今年3月の日本造血細胞移植学会総会に続いて、2015年10月31日から11月2日の会期で第20回アジア太平洋造血細胞移植学会(APBMT)年次学術集会を沖縄で開催します。会場は沖縄北部の万国津梁館とブセナテラスで、沖縄の自然と学会を同時に満喫できる最高のロケーションです。万国津梁館は2000年沖縄サミットが開催された会議場でもあります。ASBMTやEBMTと比較してAPBMTの知名度は高くはありませんが、移植に関する最新の知見を得る場だけではなく、多様なアジアの国々の移植の現状を理解し交流を深め、移植を通じたアジア諸国の連携強化と質の向上を議論するフォーラムとなることを願っています。ちなみに万国津梁は“a bridge between nations”を意味する言葉です。日本の移植医療に関わる多数の方々の参加を心よりお待ちしております。

## 平成26年度同種造血細胞移植後フォローアップのための 看護師研修を終えて

看護部会 委員長 近藤 咲子  
(慶應義塾大学病院 看護部)

昨年に引き続き日本造血細胞移植学会看護部会では、同種造血幹細胞移植後患者の外来におけるフォローアップに係る看護師を対象として、全国より研修者129名の参加を得、名古屋で3日間(19時間)の研修を行いました。

今回の研修内容も、造血細胞移植を含む血液造血器腫瘍疾患看護に係わる看護師のクリニカルラダーⅢのレベルの看護師で、既に外来フォローしている若しくはする準備が整っている施設を対象としているため、基礎編ではなく応用に入れる段階のレベルとしました。さらに、座学のあとに3日目には、同種移植後2事例を使い実際どのようにフォローしていく必要があるかがイメージできるよう演習をグループ(6人前後)で経験ある看護部会メンバーがファシリテーターとしてサポートして行いました。グループは、年間の移植件数によって編成し話しやすい環境としました。また、今までの研修をまとめ教科書として「同種造血細胞移植後フォローアップ看護」が今年発行されたため、新たな事例とともに予め研修まえに、研修者に配布し検討のうえでの参加をお願いしました。

研修後のアンケートは、129名全員から、結果では内容に対する満足度も高く、研修者の大半は概ね理解できたというものでした。演習に関しても演習したことで、他施設の人と話す機会が得られたと共に情報交換の場になり、効果的であったという結果は得られています。今まで3回研修を行ってきて、外来フォローの準備が整い実践できている施設は増加してきていることは、研修者の発言から分かります。一方システムとして構築していくためにどうしていけばいいのか、病院組織にどのように協力を求めていけばいいのか、理解してもらうにはどうすればいいのか等の問題も研修者から出てきています。研修自体がタイトなため、他施設との交流は事例検討時だけのため、もっと多くの施設と交流できる時間がほしいという要望も増えてきています。今後もブラッシュアップ研修をすすめていくにあたり、第36回日本造血細胞移植学会総会において、移植後フォローアップしていく看護師の知識の補充や実践能力の向上をねらった研修枠とシステムの構築をしていくためにはどうすればいいのかを考える研修枠の二つを設定し、施設からの体験発表をしたことは大変好評でしたので、次回の総会でのブラッシュアップ研修の内容に加えていきたいと思えます。

今後も看護師の配置異動のため、新たに取り組んでいる施設対象というだけでなく、外来フォローを維持継続していくために、毎年研修者を受け入れ外来フォローできる看護師を育成していく必要があります。

## 第3回造血細胞移植コーディネーター (HCTC) 研修会の報告

HCTC委員会 委員長 一戸 辰夫  
(広島大学病院・血液内科)

造血細胞移植コーディネーター(HCTC)は、移植にかかわるあらゆる人的物的資源の円滑な調整を行うとともに、患者・ドナー候補者・それぞれの家族の支援を担う高度な専門職です。移植医療の現場においてHCTCの役割がますます重要なものとなりつつある現状を踏まえ、HCTC委員会では、3つの小委員会(研修・認定・広報)が力を合わせながらHCTCの育成と普及を支援するためのさまざまな活動を行っています。その中でも大きな行事の一つが平成23年度から開始されたHCTC研修会であり、学会認定HCTCの資格取得要件にも本研修会の受講を必須としています(2014年9月末日現在、15名が仮認定・16名が認定資格を取得しています)。

通算して第3回目にあたる今年度のHCTC研修会は、9月5日から7日まで、築地の国立がん研究センター中央病院において開催されました。今回は、従来以上に受講希望の問い合わせが多く、オブザーバーを含め参加者は32名にのぼりました。移植医療の概論に始まり、面接技術の講義や実際のコーディネートを経験したグループワークなど、3日間にわたってさまざまな側面から14コマの充実した講義が行われ、全ての参加者にとって収穫の多い研修会であったと思います。2日目の講義終了後には恒例(?)の懇親会が開かれ、講師と全国各地からの参加者が入り乱れながらHCTCの現状と未来について熱く語る夜となりました。HCTC委員会では、このような活動を通じて、HCTCがわが国の造血細胞移植の現場にさらに浸透し、多くの患者さん・ドナーやそのご家族にとって身近な存在となることを強く期待しています。来年3月の神戸での学会では、沖縄の学会で開始したブラッシュアップ研修会に加えて、コーディネートの現状と課題をテーマとするワークショップの開催も計画していますので、引き続き皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



グループワークの風景



研修会修了書授与後の記念撮影

# 日本造血細胞移植学会造血細胞移植認定医

Board Certified Member of the Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

平成25年度、平成26年度の移行措置認定医認定申請により認定された造血細胞移植認定医の一覧となります。

認定・専門医制度委員会

2014年10月1日現在：496名（50音順）

## 【あ 行】

相佐 好伸	青木 健一	青墳 信之	赤司 浩一	赤塚 美樹	秋山 秀樹
秋山 政晴	吾郷 浩厚	芦田 隆司	東 英一	東 太地	足立 壯一
足立 達哉	熱田 由子	安部 康信	新井 文子	新井ほのか	有馬 靖佳
安藤 潔	安藤 寿彦	飯田 浩充	飯田美奈子	飯野 昌樹	井口 晶裕
池亀 和博	池添 隆之	池田 和彦	池田 和真	石井 一慶	石川 淳
石川 隆之	石田 高司	石田 宏之	石田 文宏	石田 陽治	石丸 文彦
石山 謙	泉山 康	井関 徹	磯山 恵一	一戸 辰夫	伊豆津宏二
井出 眞	伊藤 悦朗	伊藤 仁也	伊藤 薫樹	伊藤 量基	伊藤 満
伊藤 能清	稲垣 二郎	稲本 賢弘	犬飼 岳史	井上 雅美	井上 靖之
今井 陽俊	今井 耕輔	今井 千速	今泉 益栄	今田 和典	今村 俊彦
今村 雅寛	今村 豊	井山 諭	岩井 俊樹	岩尾 憲明	岩戸 康治
岩本彰太郎	鵜池 直邦	植木 英亮	上田 里美	植田知代子	上田 恭典
上山 潤一	魚嶋 伸彦	宇佐美郁哉	薄井 紀子	白杵 憲祐	内田 直之
内山 人二	宇都宮 與	梅田 雄嗣	衛藤 徹也	海老原康博	恵美 宣彦
遠藤 知之	遠藤 幹也	大井 淳	大石 晃嗣	大島 久美	大杉 夕子
大曾根眞也	太田 秀一	太田 秀明	大中 貴史	大西 宏明	大西 宏明
大西 康	大場 理恵	大橋 一輝	大畑 欣也	大本英次郎	大和田千桂子
岡 宏次	小笠原正浩	岡田 恵子	緒方 正男	岡田 昌也	岡野 晃
岡村 篤夫	岡村 隆行	岡本眞一郎	岡本 隆弘	岡本 康裕	小川 淳
小川 一英	小川 啓恭	小川 亮介	奥野 貴史	奥村 廣和	小倉 和外
小倉 秀充	尾崎 敬治	尾崎 淳	小澤 幸泰	尾関 和貴	鬼塚 眞仁
小野 孝明	小宅 達郎				

## 【か 行】

甲斐 龍幸	賀川 久美子	柿木 康孝	垣花 和彦	角田 治美	賀古 真一
笠井 雅信	笠原 千嗣	風間 啓至	梶原 道子	梶原 良介	片山 義雄
加藤 啓輔	加藤 光次	加藤 剛二	加藤 淳	加藤 春美	加藤 元博
加藤 裕一	金森 平和	蟹江 匡治	金兼 弘和	金子 隆	金子 仁臣
兼子 裕人	兼村 信宏	釜江 剛	上辻 由里	上村 智彦	亀崎健次郎
彼谷 裕康	烏野 隆博	川井 信孝	川上 恵基	河崎 裕英	河野 嘉文

川村眞智子	諫田 淳也	神田 善伸	菊田 敦	岸 賢治	木藤 克之
金 成元	木村 文彦	清谷知賀子	楠本 茂	工藤 寿子	國富あかね
久保 恒明	熊本 忠史	黒川 敏郎	黒川 峰夫	黒澤 秀光	黒澤 光俊
黒田 純也	黒田 啓史	黒田 裕行	康 勝好	合井久美子	香西 康司
幸道 秀樹	神波 信次	河野 彰夫	古賀 友紀	子川 和宏	小阪 嘉之
小島 勢二	児玉 祐一	小寺 良尚	後藤 裕明	後藤 守孝	小沼 貴晶
小林寿美子	小林 武	小林 直樹	小林 光	小林 正夫	小林 裕
小林 良二	小松 恒彦	五明 広志	近藤 健	近藤 忠一	権藤 久司

## 【さ 行】

斉藤 貴之	斉藤 健	酒井 リカ	堺田恵美子	坂下 一夫	坂田 尚己
坂巻 壽	佐倉 徹	佐々木伸也	笹原 洋二	佐藤 勉	佐藤 雄也
佐野 秀樹	佐野 文明	澤 正史	澤田 明久	澤田 賢一	澤田 道夫
塩田 曜子	塩原信太郎	塩味 正栄	篠田 邦大	島崎 千尋	嶋田 明
嶋田 博之	清水 誠一	清水 隆之	清水 直美	志村 和穂	白藤 尚毅
新小田雄一	進藤 基博	末延 聡一	杉尾 康浩	杉田 完爾	杉田 純一
杉盛 千春	鈴木左知子	鈴木 大介	鈴木 信寛	鈴宮 淳司	角南 一貴
住 昌彦	関 正則	相馬 俊裕			

## 【た 行】

田内 久道	多賀 崇	高木 愛子	高木 伸介	高崎 啓孝	高田 覚
高塚 祥芝	高橋 聡	高橋 勉	高橋 義行	高橋 涉	高畑むつみ
高松 博幸	高見 昭良	高山 信之	瀧澤 淳	滝田 順子	田口 潤
田口 淳	武内 正博	竹下 明裕	竹田 勇輔	竹中 克斗	田坂 大象
田地 浩史	但馬 史人	田近 賢二	立花 崇孝	田中 順子	田中 淳司
田仲 弘行	田中 正嗣	田中 芳紀	田中 竜平	谷口 修一	谷澤 昭彦
谷本 一樹	谷本 一史	田野崎隆二	田端 淑恵	田淵 健	玉木 茂久
玉置 広哉	田村 真一	崔 日承	千葉 広司	千葉 滋	張 高明
趙 龍桓	陳 基明	通堂 満	塚田 信弘	辻 浩一郎	堤 豊
椿 和央	鶴見 寿	豊嶋 崇徳	寺倉精太郎	照井 君典	土岐 典子
鴫田 勝哉	砥谷 和人	時政 定雄	徳田 桐子	富澤 大輔	豊崎 誠子
鳥本 悦宏					

## 【な 行】

内藤 健助	永井 謙一	中尾 眞二	中沢 洋三	中嶋 康博	中瀬 浩一
中世古知昭	中根 孝彦	長藤 宏司	中邑 幸伸	中山 一隆	成見 弘
名和由一郎	西尾 充史	西川 拓朗	西田 徹也	西村 良成	西脇 聡史
野口 靖	野村 昌作				

## 【は 行】

萩原 真紀	萩原將太郎	橋井 佳子	橋口 道俊	橋野 聡	橋本 尚子
長谷川大一郎	畠山 直樹	畑中 一生	八田 善弘	初見菜穂子	花田 良二
濱 麻人	浜埜 康晴	早川 晶	林 孝昌	林 敏昭	原 純一
原 朋子	原 雅道	張替 秀郎	菱澤 方勝	日高 道弘	日野 雅之
百名 伸之	平田 大二	平山 雅浩	福島 啓太郎	福島 卓也	福田 隆浩
福野 賢二	福本 哲也	藤井 伸治	藤枝 敦史	藤岡 龍哉	藤崎 智明
藤崎 弘之	藤澤 信	藤澤 紳哉	藤島 直仁	藤田 直人	藤田 浩之
藤巻 克通	藤盛 好啓	藤原 弘	藤原実名美	淵田 真一	古川 達雄
平安山英穂	朴 永東	星野 匠臣	程原 佳子	堀 司	堀部 敬

## 【ま 行】

前田 尚子	前田 嘉信	前馬 秀昭	政氏 伸夫	増子 正義	増田 真一
増田 昌人	町田真一郎	松井 利充	松下 章子	松橋 佳子	松原 悦子
松村 到	松本 公一	三浦 康生	三澤 真人	水田 秀一	三谷 絹子
三井 哲夫	三井 秀紀	皆内康一郎	南 次郎	南口 仁志	宮腰重三郎
宮崎 泰司	宮崎 泰彦	宮武 淳一	宮村 耕一	宮村 能子	宮本 敏浩
三輪 哲義	麦島 秀雄	牟田 毅	村井 一範	村上 純	村田 誠
村山 徹	室井 一男	望月果奈子	望月 慎史	望月 康弘	森 毅彦
森 鉄也	森 政樹	森 有紀	森尾 友宏	森下 剛久	森島 聡子
森島 泰雄	森永 信吾	森本 哲	森本 克		

## 【や 行】

谷ヶ崎 博	柳生 友浩	薬師神公和	野吾 和宏	安井 昌博	矢内 友子
矢野 真吾	矢部 普正	矢部みはる	山口 博樹	山口 正木	山崎 悦子
山崎 聡	山崎 宏人	山下 浩平	山下 卓也	山田 俊樹	山根 孝久
山本 一仁	山本 聡	山本 雅樹	湯地晃一郎	油布 祐二	横田 朗
横山 洋紀	吉岡 聡	吉田 功	吉田 奈央	吉田 均	吉永健太郎
吉満 誠	米澤 昭仁	米谷 昇	米積 昌克		

## 【ら 行】

李 政樹

## 【わ 行】

若山 聡雄	脇 房子	和氣 敦	和田 暁法	渡辺 輝浩	渡辺健一郎
渡辺 力	渡辺 浩良	渡邊 光正	渡辺 泰行	渡部 玲子	

以 上

## 看護部会企画 「造血細胞移植看護ネットワークHCTNN」の設立に思いを寄せる

「ネットワーク」って、なんと素敵な響きでしょう。皆さんお読みになりましたか、JSHCT Letter NO55を。造血細胞移植の医療は医師と看護師の協働を基本として発展変化してきた経緯があります。

日本の看護界においては、1996年、CNS制度が発足しました。すでに骨髄移植看護分野は、患者・家族・医師から、専門的な関わりを必要とされており、私達は、全国の移植に関わっている看護師でネットワークを作り、活動を共にし、専門性を高めようという気運がありました。1995年12月には、国立がんセンター中央病院が発起元となり、東京大学医科学研究所、名古屋第一赤十字病院、大阪府立成人病センターの看護師により、全国の看護師に呼びかけを行う準備を開始しておりました。

1996年12月20日、造血細胞移植学会総会・ホテルグランヴィア岡山の会場にて、「造血細胞移植看護ネットワーク設立」の説明会を行い、会場が溢れるほどの多くの看護師の意見交換の結果、大多数の賛同を得て趣旨が受け入れられました。

私達の求める造血細胞移植エキスパートとは、高度な専門知識と技術を用いた看護の実践者であること、看護職者に対する教育と指導ができること、進んで看護研究を行う意欲と能力があること等としました。

ネットワークの活動として、年3回の勉強会を企業の方の応援もいただきながら実施しました。思い出せば、第1回目は「移植、最近の動向」慶應義塾大学病院岡本真一郎先生と「移植医療における患者家族の声」日本つばさ協会橋本明子さんの講演とディスカッションでした。ディスカッションの時間は、多くの方から看護についての意見が出されました。開催場所は東京、名古屋、大阪、福岡、金沢、福島、札幌などを巡り歩きました。

「造血細胞移植看護ネットワーク通信」を年2回発行し、病院の紹介や患者さんの声を取り上げ、情報の発信と交換ができました。学会での研究発表は「日本造血細胞移植学会看護研究集録集」として発刊し、研究の結果、出来上がったパンフレットやガイドラインは「造血細胞移植における口腔ケア2003年10月」「造血細胞移植後早期の感染管理2003年11月」等です。数年に渡り、国内移植病院の研修や米国施設研修も実施しました。

2003年12月、私達は造血細胞移植学会理事会へ、学会看護部会として統合させていただけるように希望し、看護師の熱い思いが認められ、現在のような看護部会が位置づけられ、学会理事としても活躍できることとなりました。

移植看護は激務であると思います。そして同時に患者さん、家族の方も一生懸命で必死です。高度の知識と技術、コミュニケーション能力の高さを自然と求められます。移植看護を継続することにより、自分自身の看護の質が向上することに間違いはありません。現役の皆さん、看護師間で共有できること、他部署と協働できることは一杯あります、ゆったりと働く工夫をして、移植看護が人生の成長の糧になっていくと信じて頑張ってください。

元国立がん研究センター中央病院 造血細胞移植病棟看護師長 荒木 光子  
(元日本造血細胞移植学会看護部会委員長)

## 私の選んだ重要論文

- (1) Swash, B., N. Hulbert-Williams, and R. Bramwell, *Unmet psychosocial needs in haematological cancer: a systematic review*. *Support Care Cancer*, 2014. 22 (4): p. 1131-41.

(1) 心理社会的な問題は生命を脅かす疾患を抱える多くの患者に存在するといわれているが、血液腫瘍患者での心理社会的unmet needs (未だ充足されていないニーズ) が具体的に示されてこなかった。という背景から、心理社会的な問題についての患者の関心事についての論文である。18論文のシステマティックレビューをおこなっている。Psycho-oncology journal1で4,549タイトルから18論文が精選され評価 (HTA Initiative13使用) された。サンプルサイズは28-2331、年齢43.6-62 (平均) であった。結果、示されたニーズは、‘心理的ニーズ (ストレス、心配)’ ‘再発の恐れ’ ‘情報ニーズ (疾患、治療、経過、生活)’ ‘家族と医療従事者間に関するニーズ (良い関係、良い情報)’ であった。ニーズの評価は、治療やサバーバシップでの心理社会的健康をサポートし続けるために重要であるとしている。

- (2) Hall, A., et al., *The Survivor Unmet Needs Survey (SUNS) for haematological cancer survivors: a cross-sectional study assessing the relevance and psychometric properties*. *BMC Health Serv Res*, 2014. 14: p. 211.

(2) 一つ目の論文では、測定尺度として様々なものが使われていた。この論文は血液腫瘍疾患患者のニーズ評価尺度の論文であり、同時期に発表されていた。既存のSUNS:The Survivors Unmet Needs Survey尺度 (5下位尺度89項目) のオーストラリアバージョンの開発論文であった。経済的心配 (11項目)、情緒的健康 (33項目) ケアの利用と継続 (22項目)、情報 (8項目)、関係性 (15項目) で構成されている。

日本語版が無いため直ぐに用いることは出来ない、また、情報提供は個別の価値も反映して行う必要があり一律に考えることは出来ないが、このような尺度を用いて、日本でのunmet needsを考え、血液疾患を有した患者やそれを支える人のQOLを考えていく必要があるのではないかと思う。

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 成人看護学分野  
がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 山花 令子

## 施設紹介

## 鹿児島大学 小児科

鹿児島大学 小児科 岡本 康裕

鹿児島大学小児科では、当時の川上清医師を中心とし、九州がんセンターのサポートを受けて1992年から骨髄移植を開始した。日本骨髄バンクの認定施設になったのは、1994年である。1992年から2003年の間は、平均年間4例の移植を行った。2003年に河野が教授として赴任以降移植数は増えて、平均年間11例になっている。現在の日本血液学会の専門医は5名で、日本造血細胞移植学会の認定医は4名である。移



植コーディネーターはいないが、小児科を専門とするソーシャルワーカーが種々の手続きを補助している。2013年末に新病棟へ移転し、無菌室はクラス100が2床、クラス10000が3床となり、部屋の運用は比較的簡単になった。小児科の特性として、多岐に渡る疾患を対象にしており、血液疾患、腫瘍疾患だけでなく、免疫不全症、先天代謝異常症に対しても移植を行ってきた。卒後臨床研修制度の始まる前から、当科ではチーム制の医療体制を取ってきた。1チーム5から7名の医師で診療を行うために、移植を受ける患者を担当しても、担当医としての負担は大きすぎはしない。小児科医の循環器専門医、神経専門医、内分泌専門医、腎臓専門医などがチームにいるために、日常的に多方面からの診療が行えている。また最近では集中治療を専門とする小児科医がICUに常勤しているため、集中治療部との連携はさらによくなっている。末梢血幹細胞採取や細胞処理、保存、キメラ解析のためのSTR解析は輸血部で行っている。検査部ではマルチカラーのFACSが稼働し、診断やMRD解析を行っている。2010年からは、先天性心疾患の特に複雑心奇形の術前術後管理を行うようになったので、移植医療の大変さは、相対的に軽減されているように感じられる。多くはないが、同種ドナーの骨髄採取も行っている。施設の協力もあり、施設の都合で採取を待たせることはほとんどない状況である。

研究としては、造血幹細胞の加齢現象の検討、G-CSFによる末梢血幹細胞の動員機序、ナノ粒子を用いたPCR法によるウイルス感染症の早期診断、ブスルファン・シクロホスファミドの血行動態、薬物代謝などについて行なってきた。最近興味深い結果が得られており、本学会でも報告してきた。2014年にブスルファンの血中濃度測定を院内で行い、TDMを用いた研究を開始している。研究的な治療としては、CD34陽性細胞に純化した造血幹細胞移植、難治性疾患に対するNK細胞移植、血縁ハプロ移植などを行っている。

## 移植病棟立ち上げを経験して

長野赤十字病院 血液内科 小林 光

最近、長野県で3病院目となる移植病棟開設にあたり、長野赤十字での移植立ち上げの経験話を話して欲しいと先輩医師から依頼された。長野日赤における移植病棟立ち上げからの17年間はあっという間でもあり、ゆっくり振り返ることもなかったため、これまでを振り返る良い機会ともなった。筆者が1996年に移植の研修をさせていただいたのはO先生のいらっしゃる慶應大学病院であった。当時長野県では移植の必要な患者さんはその多くを東京や名古屋に紹介しており、長野県内に本格的な移植のできる施設を立ち上げる必要から私が1年間研修に行くことになったが、私にとって移植は初めての経験だった。

慶應では1年間で50例近い移植症例をチームの一員として経験させていただき、そのうち23例については主治医をさせていただいた。もちろんこれで移植を立ち上げるには十分な経験ではない。そのため、長野日赤では最初は緊張の連続であった。特に最初の1例目の同種移植を行った時は、前の晩は余り眠れないほど緊張した。骨髓採取がうまくいくのか、輸注の手順は大丈夫か、などと考え始めたら不安となり眠れなくなってしまった。そのため、1例目の同種移植症例が無事退院した時は本当にうれしくほっとした。その後は何か困ることがあるとO先生にはFAXや電話、メール等で頻繁に相談させていただき、本当に助かった。

移植病棟立ち上げから10年目の節目に記念の講演会を開催した際にO先生にご講演いただいて、「よく一人で移植を立ち上げたね」とおっしゃっていただいた。しかし、私一人の力は微々たるもので、実際には多くの人の努力のおかげだった。特に私の上司だった部長の先輩医師、立ち上げ時の移植病棟の師長・副師長さん、リーダークラスの看護師さん、薬剤師さん、には感謝してもしきれない気持ちである。皆バラバラの職場となってしまったが、今でもこのメンバーで1年に1回は会って食事をしている。そして移植チームで大切な看護師さんの教育指導にあたっては、慶應病院のK師長さんに研修当時から親身にご指導いただき、それがスムーズな病棟立ち上げにつながり、大変深く感謝している。

移植立ち上げから数年して臍帯血移植を始めたが、臍帯血移植を始めてしばらくしてから、生着不全症例が出てしまい、金沢大学のN先生にご相談した。ひどい口腔内壊死の合併のため、耐性緑膿菌が血培から連日陽性となる厳しい状況であったが、適切な前処置を教えてください緊急臍帯血移植で救命することができて大変感激した(この患者さんはその後も長期に再発なくお元気で仕事をされている)。以後、N先生にもご相談させていただくことが多くなり、まるで同門の医局員であるかのように親身にご指導いただくようになった。その後も虎の門病院のT先生や駒込病院のS先生などにも大変お世話になり、その他にもメール相談等でたくさんの先生方にお世話になってきた。

このように17年間を振り返ってみると、いかに多くの仲間や先生方から支えていただけてきたかを痛感する。そして、大学の医局や病院の垣根を越えて、いつでも相談に乗ってくださる素晴らしい先生方がたくさんいるからこそ、日本の造血幹細胞移植医療は、質の高い医療を提供できるのではないかと感じている。

**次号予告** 次回は、北海道大学医学部 血液内科 重松明男 先生です！

## 各種委員会からのお知らせ

### 【倫理審査委員会】

倫理審査委員会は、利益相反(COI)に関する現行の指針・細則・規程の見直し・改訂作業を進めております。日本医学会の医学研究のCOIマネジメントに関するガイドラインに準拠する方針を継続しますので、大幅な変更は計画しておりません。詳細については後日改めてお知らせ致します。

第37回日本造血細胞移植学会総会に応募された演題の内容について、個人情報保護の配慮がなされているか検討することになっております。とくに遺伝性疾患(遺伝子解析)の症例発表については、発表について患者本人(保護者)の同意を得ていただくことが必要な場合がありますので、ご注意下さい。

倫理審査委員会 委員長 井上 雅美

### 【国際委員会】

JSHCTは韓国造血細胞移植学会(KSBMT)および米国造血細胞移植学会(ASBMT)との連携を進めております。お互いの学術集会への相互参加、共同セッションを行うことのみならず、特にASBMTとはClinical Research Training Course、移植施設の訪問、等についても意見交換を行っておりますが、会員の皆様からご意見・ご要望等も歓迎です。学会事務局あてにお送りください。また、小寺良尚先生が、国際造血細胞移植研究センター(CIBMTR)のCIBMTR 2015 Distinguished Service Awardを受賞されました。授賞式は、2015 BMT Tandem Meeting期間中(2月11～15日、サンディエゴ)に予定されています。

アジア太平洋造血細胞移植学会(APBMT)のLate Effect WGにより長期生存者に対する晩期合併症のスクリーニングと予防のためのガイドラインが作成されましたが、その実効性に関する国内施設への調査は熱田由子委員が中心となって行われました。この調査結果は参加施設に配布すると共に3月のJSHCT学術集会で発表の予定です。なお、2014年度のAPBMT学術集会は中国・杭州で10月16～19日に開催されますが、2015年度は岡本真一郎理事長を会長として10月30日～11月1日に沖縄での開催予定となっております。

国際委員会 委員長 高橋 聡

#### ●平成26年度年会費について

平成26学会年度年会費のお振込みが未だお済みでない方は、お早目にご納入ください。事業年度は12月31日までとなっておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

#### ●平成27年度評議員応募申請について

平成27年度の評議員応募申請期間は「10月6日(月)から11月7日(金)※消印有効」となっております。応募方法等、詳しくは本学会HP「会員専用お知らせ」をご覧ください。

#### ●本学会会員情報へのご登録内容変更につきまして

ご勤務先、ご自宅住所、メールアドレス等、本学会へのご登録情報に変更がございましたら、Eメール、FAX等にてお早目に事務局までお知らせください。

#### ●ご登録いただいているメールアドレスについて

本学会では、皆様に対する各種ご案内をメールにて配信しておりますが、昨今、アドレス変更の届出漏れが多く、メールが不達となる会員の方も多数みられます。メールアドレスを変更された際は、なるべく早く届出いただくとともに、一定期間、事務局からのメールが届いていない方は、一度、事務局までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

【JSHCT事務局より】